

マラウイ人の見た日本

第1回 チョモラ・ミケカさん

—国費留学生として日本に6年間滞在、現在はマラウイ大学で教鞭をとる— (2013 年 11 月)

チョモラ・ミケカさん (Dr. Chomora Mikeka)



ミケカさんは国費留学生として 2006 年に日本へ渡航、横浜国立大学で電子工学の修士号及び博士号を取得し、2012 年にマラウイに帰国しました。博士課程では携帯電話と地上波デジタルテレビの電波を用いた環境発電とその応用に関する研究を行い、現在ではマラウイ大学で生徒を教える傍ら同分野での研究を続けています。また、マラウイ通信規制庁など政府機関と提携した研究プロジェクト (the Malawi White Spaces Project in Partnership with the Malawi Communications Regulatory Authority (MACRA) and the International Center for Theoretical Physics (ICTP) in Trieste, Italy) のディレクターとしても活躍しています。

ミケカさんは、2013 年 12 月 11 日、'Best ICT Reseacher' 賞を受賞、マラウイで最も優秀な情報通信技術研究者に選ばれました。

-日本政府(文部科学省)奨学金留学について、どのように知りましたか？また、応募しようと思ったきっかけは何ですか？

日本への留学について教えてくれたのは内海武(うつみたけし)教授でした。内海教授はグローバル・ユニバーシティ・システム(GUS)の立ち上げのために、途上国の若い才能を探していました。教授はインターネットで私を知り連絡をくれました。私は教授に自分が小さい頃から日本に興味をもっていたこと、また日本で勉強したいと思っていることなどを説明しました。たまたま同時期にマラウイ大学ゾンバ事務所に(当時マラウイを兼轄していた)在ザンビア日本国大使館から日本政府奨学金留学(国費留学)の募集要項が届きました。当時副学長だったカムワンジャ教授と相談の上、私はこのプログラムに応募することとなりました。マラウイ大学やJICAからいろいろな協力をいただき、2005年ついに国費留学生として選ばれました。当時マラウイから日本へ留学している人はほとんどいませんでした。

-日本に行く前、日本に対してどのようなイメージを持っていましたか？

私が最初に日本と出会ったのは、家族が使っていた日本製のラジオを通してでした。子どもの頃からラジオの技術に大変関心があり、叔父の家にあった壊れたラジオを使ってその構造を学ぶうちに、自分でもラジオが作れるようになりました。はじめてラジオを作ったのは1991年、中学生のころでした。その頃から日本に留学してラジオに関する技術を学びたいというのが私の夢になりました。'Made in Japan'というマークのある電化製品には何でも興味を持ちました。叔父は私が学校で一番の成績をとった褒美にカシオとセイコーの腕時計をくれましたが、これらも私にとっては貴重な日本とのつながりでした。

-日本に着いた直後はどのような気持ちでしたか？

日本に着いた時には「大成功！」という気持ちでした。夢が叶ったという思いでとても興奮していたので、これから起こるだろう苦勞の数々についてはあまり考えていませんでした。もちろん、想像していた以上に日本人がおとなしいことには驚きました。そういうこともあり、最初の年は外国からの留学生と主に友達になりましたが、日本語や日本文化を学ぶためには日本人ともっと関わらなくては行けないと気づき努力しました。最終的には、私の海外で作った友人のほとんどは日本人となりました。マラウイに戻り彼らと会えなくなって寂しい気持ちでいます。

-日本ではどこに住んでいましたか？どのような勉強をしていましたか？

日本にいた6年間を通して神奈川県横浜市南区で暮らしていました。横浜国立大学・電子物理工学専攻の新井教授のもと勉強し、同大学で修士号及び博士号を取得しました。

-日本で苦勞したことはどのようなことですか？

日本についてすぐの数年、言葉の壁に苦勞しました。日本語が出来ない自分にとって、夢に描いた日本と、暮らしてみた実際の日本は全く異なるものでした。特に日本の通信技術を学びたいと思い留学したにも関わらず、日本語が出来ない自分はこれら情報にアクセスできず、十分に学術研究も行えませんでした。日本での経験を充実したものにするためには、言葉を習得しなければ行けないと強く感じました。チューター制度や必須の日本語研修等を通して、日本語でコミュニケーションが徐々になできるようになると周りの態度も変わりました。最初、研究室の学生たちは自分のことをあまり好きではないのかなと思っていましたが、彼らに片言の日本語で話しかけ始めると、急に皆は親しみを持って接してくれるようになりました。日本語や日本文化を知ろうと努力するうちに、学内外でたくさんの日本人の友人が出来ました。

-日本滞在中の一番の思い出は何ですか？

研究発表のために様々な会議に参加したことや、ホームパーティーに呼ばれたこと、ホームステイでの経験などが印象に残っています。これらの機会を通して、日本人の温かさ、豊かな文化に触れることが出来ました。

-日本滞在を経てマラウイに戻った今、あらためて日本について良いと思う点は何ですか？

私が素晴らしいと思うのは日本人の正直さと勤勉さです。日本人は他人の気持ちに配慮しながら「正直」であろうと努めます。日本人は誰かに何かを頼まれ、断らなくては行けないときでも「NO」というのにずいぶん躊躇します。これは他人の気持ちを傷つけないという日本人の優しさから生まれる行動だと思いますが、マラウイでも似たようなことがあります。マラウイ人も断らなければ行けないとき、はっきり「NO」とは言わず、「話はよく分かった、今度連絡するからそのときまた話あおう」と言うのが普通です(こう言われた後に実際に連絡をもらうことはほとんどありません

が)。この意味で、マラウイ人の私にとって日本人の「遠回しの文化」というのは共感出来るものでした。

また、与えられた仕事を出来るだけ迅速かつ完璧に行おうとする日本人の勤勉さからも多くを学びました。私の母国では一般的に言って、何か仕事をしてもらおうと思ったら我慢強く待たなければいけません。急いでやってもらおうとすると不完全な結果が出てくるのが目に見えているからです。チェワ語の諺で「状況によって嘘は許される(kukana nsalu ya akulu nkuviika ‘Circumstances may justify a lie’)」というのがあります。つまり、マラウイで急いで仕事をしてくれと注文したら、失敗する状況を許しているようなもので、結果に不満があっても「急がせたから失敗したんだ」と言われてしまうでしょう。私は6年間の日本滞在で日本人の仕事ぶりを学び、今では効率を十分に意識して仕事をするようになりました。

また、日本人の強みは何よりその忍耐力だと思います。彼らは簡単にあきらめようとはしません。困難な状況に置かれたり、先の見えない課題を与えられたときに日本人の見せるストイックな姿勢には目を見張るものがあります。

-日本とマラウイの違いをひとつあげるとしたら何ですか？

日本とマラウイの違いとして感じたのは、日本人が互いと競い合うことを好まないことです。日本人はチームとして共通のゴールに向かって働くことを良しとし、アグレッシブな態度で仲間と競い合うことはあまりしません。一方、英国の教育制度を模範としたマラウイの学校では生徒同士が競い合うことが奨励されます。この点、競争的な雰囲気慣れている私は、日本の授業や研究活動では少し自分を押さえないければいけませんでした。このような違いには日本と比較してマラウイには資源が限られているという背景もあるでしょう。限られた機会を掴むために、生徒たちは競い合わなければいけないのです。ただし、マラウイ人は皆と分け合うことも得意ですので、競い合いながらも周りと分け合うことでバランスがとれているのかもしれません。

-日本で得た経験や知識は現在どのように生かされていますか？

日本での経験を通して、どのようなことをするにあたっても効率性を考えるということを学びました。現在、大学での研究活動などでも効率性を意識することで最大限の仕事が出来ます。効率性を追求するのは個人的には良いことばかりではないかもしれませんが、国に貢献する仕事を行う上では重要なことです。自分の生まれた国を愛し、自国のために一生懸命働くという精神も日本滞在を通して学んだことのひとつです。



博多で研究室の仲間たちと



TICADIV(2008 年)にて



日本の友人たちと



親友との一枚